



校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第4号

令和3年4月27日



○校長室だより・・・

(隠岐)西郷岬灯台から西郷湾を臨む⇒



校長室だよりをどう思うかで、なにをねらいに出すのか、はずかしながら自分の中でまだはっきりしていないのが実情です。教頭時代の最初の2年間で一緒に、当時の隠岐養護学校の野津保校長先生が、校長室だよりを出しておられ、あらためてどういうねらいで出されていたか読み返してみました。校長室だよりの名

かんてき

前は「閑適の窓から」。管理職勤務も、特別支援学校勤務も、単身赴任もはじめで不安と緊張の中で着任した時に、校長先生から「新着任のみなさまへ」とい

かんてき

うお手紙とともに「閑適の窓から」44号をいただきました。そこには、「仕事の周辺部分(直接日々の仕事の話題は取り上げない)や隠岐の話題などをひまつぶしに書き、ひまつぶしに読んでもらうのを原則としています」と書かれていました。そして、「すべてがバラ色というわけにはいきませんが、失敗やまちがいをおかしながら、みんなでよりよい職場をつくって、よりよい実践を作り出すことができればよいなと思っています。」と綴られていました。その言葉で安心した気持ちになるとともに肩の力が抜けた感じがしたのを覚えています。令和3年度の重点目標等で、本校・分校共に「～安心して失敗できる学校～ 安心・安全な学びの環境づくり」を掲げたのは、この時の思いが一つあるのだと思います。3年間で133号出され、45号からを楽しみに読んだことを思い出します。手書きのやさしい字で紙の色を毎号変えてあるのも気遣いだったと思います。そして毎回必ずすべての教職員の机に置いて回っておられました。今思えばそれをきっかけに話をしたり声かけをしたりするなかで、報告や相談をしやすい雰囲気をつくっておられたのだと思います。

合い言葉にした「～自立した大人となるために～」の“自立”について、「閑適の窓から」で触れておられる号があります。そこには「自立していくということは、必死になっている自分の積み重ねである。と同時に、必死になっている自分に必ず寄り添ってくれている他者を忘れてはならない。自立は誰の手もかりず一人でがんばるという意味ではなく、他者の存在をよりどころにして自分でがんばることととらえるものだと思う」と書かれていました。合い言葉にした「小さな挑戦、小さな善行」に込めた思いに通じるとあらためて思うとともに、知らず知らずと校長先生の言葉や学校経営等から学んでいたことを実感しました。そのあと転勤した当時の松江東高校の永瀬校長先生が掲げておられた合い言葉「自立への道程」でも同じ思いや学校経営に出会いました。そうした出会いがあって今の自分があるのだと感謝するとともに、「職場は一将の影」という言葉をかみしめているところです。

次号では、『教員研修』という本の“師の教え”というコーナーで紹介されていた「人を信じるということは、裏から疑うということ」という言葉に触れて、私なりに考えたことを書きたいと思います。